

多賀城市 復元の多賀城南門を公開

多賀城創建1300年を迎える2024年度の公開へ向けて、多賀城市が復元工事を進めていた多賀城南門が完成し15日、報道陣に公開された。工事期間の仮の屋根だった素屋根が1月に外され、高さ約14・5層の南門がお目見え。本瓦葺きの屋根と丹土色に塗られた南門の姿は、陸奥国府の威厳を象徴する。平行して築地塀復元工事が進むため、南門の姿を見ることができるようは再び仮囲いで閉鎖する3月の初旬ごろまでという。当日は、万葉衣装に身を包んだ深谷晃祐市長が事業の進捗などを報告した。

多賀城市では、多賀城創建1300年の記念事業として南門の復元をはじめとした周辺整備を進めており、東日本大震災か



万葉衣装で取材に応じる深谷市長

施工は松井建設 震災復興の創造的シンボルに

らの復興のシンボルとしても位置付けている。

南門は、古代東北の政治、文化、軍事の中心として栄えた国府・多賀城の正門に当たり、多賀城の正面を飾るために屋根が二重になった格式の高い門（二重門）だったと考えられている。復元に当たっては、8世紀中ごろ（政庁二期）の南門を、当時と同じ政庁から約380層南側の位置（多賀城市市川立石地内）に原寸大で整備。遺構を養生するため、約2層盛土した上で復元した。構造はW造平屋建てで、高さは約14・5層、桁



完成した多賀城南門

行（幅）10・5層、梁行（奥行き）6・6層。屋根は本瓦葺きで、形状も格式が高いとされる入母屋造。木材は当時と同じくリ材を調達して使用するなど、可能な限り古代の技法を取り入れて整備した。設計・監理は文化財建造物保存技術協会、復元工事は松井建設が担当した。

また、昨年12月からは南門の両脇につく築地塀（高さ4・5層、1期計画Ⅱ延長約22・0層）と、大路の復元工事に着手している。いずれも松井建設が施工。さらに今後は、南北大路南端付近にS造平屋建て、延べ約200平方層規模のガイダンス施設の整備も予定している。

この日、自身も初めて南門をくぐったという深谷市長は「まさに悠久のまち、史都・多賀城を感じられる場所になった。多賀城が誇れるシンボルになる」と話すとともに、「市内外の皆さんに多賀城創建1300年をお祝いしていただく契機にした」と期待を込めた。一般公開は24年度中を予定している。